# いちとゝ里　二支

特別
へ5
6043
3

# 夏

更衣　新樹　牡若　葵　柘榴　夏虫　短夜　樗　競馬　夕皃

牡丹　新茶　若楓　粂　橘　梔子　夏月　青梅　帷子　石竹

灌佛　卯花　卉鵑　榊　水鶏　若竹　廉子　五月雨　早苗　鮎

餘花　郭公　百合草　芥子　蚊　蛍　夏草　端午　瓜　氷室



アカキ
白露堂藏
福田文庫
横山重
56-4089

一夜酒　夏菊　扇　鵜

蝉　夕立　雲嶺　冨士詣

祇園会　茄定　暑日　汀

納涼　薫風　泉　蓮

御祓　暮夏　雑夏

## 小町踊第二

### 夏

更衣

綿ぬきといふもこれ也や合羽　季言

花乃春もいふて立ヵかへ川衣　弘永

春と夜の季かへわらか白重　定堂

お世をね出家もくつや衣の人　貞徳

麻衣やそれもまゝ衣のきそそしめ　芳昌

綿ぬきつみとり匂ひや合香　尾州ノ身

傍傍やくろねしくにあろもの人　重良

うく人やぬきせらまうれ衣の色　常倫

わすれずや若紫到来し衣之人　武田 壽信

若わかく去年の香ふくや更衣　為親

黒雲に白きや袖のかゝり袷　政之

まろきぬきハ縫目もけぬき袷かな　宗言

非情もや花を若葉のころもかへ　常辰

深みやこゝろよむ香も夜ふかも　同

ひとつ川やまた給合の旅ころも　立圃

紙帳とも蚊帳なりあつや衣之人　同

## 牡丹 付芍薬

名ぞしれりさけ日くの廿日草　徳元



花ハちんでたゝる牡丹の名香かな　重頼

日の御子すゞ猩やめぐみて廿日草　常辰

芍薬の写しやえりあへて向日草　同

## 灌仏

灌仏ハあまらたりしや蝶しやか　巖城住

## 餘花

積善の余花やありきの家桜　吉弘

卯月にも心の花やのこる月　弘永

## 新樹

枝ふしの柳ハ化仏菩薩かな　親信

しをりてハ鳥ハさゆくする寺中の末　玄札

萩花乃跡残りたる萩かな　昌意

春と夏をとりわけ持ちせり夜の棚　毛輕

蔦の末や沖紅なる風乃神　資方

夏山ハ青さ茶なりしわ末もなし　貞室

## 新茶

名も香もよろん人ハあたらしき茶かな　幸和

むかしとハいへど柴さ酒ハ新茶かな　玄佐

炎節りめつらしき香の新茶かな

来る人くなく川花小入し新茶かな　貞徳

むさし常のうしとはりの新茶かな　重庸

侘数寄や今さきむかし裏茶碗　保友

夜ハ鶯の啼茶や壺の中こもり　重以

梅の尾と茶ハまけ小緒の宇治茶かな　方孝

初例よて摘茶ハ今もむかしかな　方女

名も香も同じむかしの新茶かな　則常

新茶古茶その名小さゆる酒かな　政之

新茶よてたもひおこりそのむかし　信元

壺の古茶むかしにかはる名なりけり　宗甫

古茶新茶袋小入てもちらする　但重

表切の茶やよ庭なる鶯の几　立圃

## 卯花

卯の花は雪にも不時の菓子乃湯ゝ
雪月も一度に見する卯木哉　貞徳
鳥すれは洲ぬ卯の花を鷺かいろ　同
垣くねは雪垂なるや花うつ木　徳元
善喜はあひ打とまるうつ木哉　正重
つゝまれてハ雪うる程思ふ花うつ木　信元
卯もや風のまにまにちるふきて
善女のさい目はくわやうつき垣
卯花よ枝をたわに雪なかれ　重頼

いつもてる富士の卯やうれ雪見菓子　時真
垣ねそや白髪とそ見ゆるうつ木　嶺利
卯のをきは菱結ふや辰の時　季貞
縄つもむすゝや露のうつ木垣　好字
卯花やかうひ宮は年さかし　宗雅
おうくさけるや卯の花さかり　之圓

## 郭公

名乗せは我や構なくも泣　良春
名乗まわ捕られさほとゝきに
天の戸や夜半にかくほとゝきす　利清

賣かけハいかり高禄のほとゝきす　貞徳
放さけの門てやそこ川ほとゝきす　同
今けハ帰とらもうきよの郭公　知徳
うくひすも継子か卿きらふなそ子　重頼
百鳥ハ声紙入りそのほとゝきす　同
なくことす宮のしに婿か名所かな　同
なかれてハ身にとまるけ郭公　成安
宗祇ハ何乃字高起ほとゝきす　三家
いつまさうん伽羅の初音と聞鳥　堅詣
咲すしや布よ乃高山ほとゝきす　貞室
浦こゑをよしや難波の郭公　同

名人をなかしすハそしれ郭公　正直
名ハたし先聲改初しむか時鳥　貞盛
一こゑハ自慢か星下かほとゝきす　重周
ほとゝきす字かねや芸をかくし藝　不競
一こゑハなかさけの羅科ほとゝきす　静壽
咲ことに速よ世間そほとゝきす　信親
句ひあるこゑやこちらか郭公　定清
耳ハ錆飼ともらしやほとゝきを　同
一聲や執ちりかをほとゝきす　吉里
聲字をも切捨ぬとほとゝきす　寄り山家 正平
おひみその古今よ一こゑ郭公　元躬

鳴ときハ耳よりさきのほとゝぎす　空存

待宵の程をもかくやほとゝぎす　重勝

観里のはてよりや初ほとゝぎす　長吉

法士のうちにまませや時鳥　長之

六根乃料ハとも何もほとゝぎす　忠清

うくひすの山ともなりぬ郭公　荒木田 守武

はしけるまなかをほとゝきく　阿波 利冬

祢さめにもまてはあそせね時鳥　了首

いやあなの子たちうみとけほとゝぎす　宗鑑

ねひとりやさうてうし川郭公　播州 良政

名ゑのやられてなきかほとゝぎす　高山 笑月



ほとゝぎす鈴鹿なくに日待かな　卜琴

ちりうすくなく寒らへ郭公　正永

亮鳴もあまの海よりほとゝぎす　重良

待られてしをやみて行く時鳥　雲州 就武

一こゑハ空をすけりやほとゝぎす　随喚

目にはあるたまきくや郭公　毛輕

霧りむせふうくひすの子か時鳥　立静

俳ゝ一声乃いとこともあれ郭公　清卞

鶯もしか口かれの簿小ほとゝぎす　智詮

時鳥なくともたれ白もか那　貞立

若葉かるゝ縁まろこし郭公　政之

一こゑに庭掃とせまし時鳥　為親

鶯は又位いふり雲井の郭公　好子

咲書りしこゑはとわや時鳥　有哉

山鳥は比翼の声のほとゝきす　信世

一声や山路乃雛もかたらす　友貞

こゑせぬは無佛世界の郭公　同

山居せし縁こそとへほとゝきす　素言

根とひきは花ちりの里のかたらひを　嶺利

咲斉の數よりや声はほとゝきす　常辰

かたりきこすもりや夜宇は見たのみ　定親

待ぬるはいつれの縁来ほとゝきす　立衣



吹恵の梢もせゝく雨と時鳥　昌房

まつて咲初音や古寺のほとゝきす　同

人玉の何そとしとへはほとゝきす　同

うけまとふ雨もりかへる鳥の郭公　之圃

耳よ今見る初花よかたらきゝそ　同

月くらし地にこゑもとられ時鳥　同

声や鐘祇園精舎のほとゝきす　同

ほとゝきすこゑもや夜に一声かり　同

一声や本華寺にせんかとおす　同

子規花ころもやうつくこゝしこゑ　同

## 杜若

絵師も似せかぬいろそかきつはた　良徳
あかみどりそやたむらの花　惟貞
此水はあやむらさきかはのふ　光政
畫工かともいはゝいはせし色よむ　留 信安
池あれ行も葉絵何のかほされ　不競
緑りみとりや紫しさと杜若　正房
つはさこそ葉は山しきさのかほ花　安俊
あやめ葉と似たるや頬と色は姿　有哉
其玉やたくはみたまうかほよむ　交貞
とれつゝる水のお花やかきつはた　立圃



小松まくらかけくなかしむ色よ花　同

## 若楓

去年や色葉集乃門の楓　麈哉
雄なりて赤き若葉やかへて　正依
こちまねの楓の露や浮まそうき　玄札(?)

## 手鞠

花のまとも風乃まつまに手鞠かな　高敦
月いてゝよしやてまりの花の庭　大窪 貞也

## 百合草

墨ゆりハこゝろ澂かしら乃露　貞徳
蓬莱の嶋に墨ゆり小姫ゆり　貞継
こゝ絵なく打人や墨ゆりの花　豊隆
夕かほ乃陰よりさん車百合　正直
つきのけくこせぬやうし風車ゆり　延次
蟷螂や斧ふりてむかふくるま百合　塵哉
おく露ハ夜光の玉か車ゆり　定歳
流るへなき水紋おらやくるま百合　三辰
玉そくゆりかこほしゝ花の露　澤元
めくりかはいて見しやそれ糸車ゆり　喜雅



あかしてハ下照姫やゆりのそか　松安妻
植るみ心ちもよひぬ小姫百合　山田女
墨の移實かゆりハ露乃玉　尊当
吹風より花端ちるひやくるまゆり　意朔
さかめるハ宮やせられや小姫ゆり　当親妻
遣方やたもひめくるれ車ゆり　馬越元定妻
とそ咲ハこれそ見よハ車百合　可閑
ませ垣ハ車やとりか百合のそか　正朝
姫ゆり小ゆひ名付する雨かそふ　定親
さよ風にしをれつゝ百合や松浦姫　同
月よりもぬ墨とさいそし百合の花　政之

はなむろハまだよりねや小姫ゆり　宗雅

姫ゆり花よこ川なやいろこのミ　常辰

佛おまよ川黒百合やまと歌　同

手車ニはくるや風の小姫ゆり　昌房

黒ゆりの露や垣守乃水かゞみ　立圃

教ふつしもおしきみ紋付ゆりの花　同

葵

あふひ草二葉ハ賀茂の下上かれ　廣庭 斯紹

玉露やはつむ乃こゝへのいきもす玉　

柄の葉やいつも葵のこゝへなりし　梦友

宿取もうけくたのむや御蔭葵　定親

祭

水神も宇積してけふ也永祭　常辰

わたりもり川ハいく流そやまつり　之宗

うきさの葉や榊引宿比まつり　定親

あり日き日れさりしもひやま非祭　梦友

榊

非木ハ花なでたまさつきの非　立圃

茄子

実よりも先さけハかゝらし茄子の花　伊勢 盛政

花の色かゝぬとてしそ茄子坊主　之音

柘榴

実ハおくてかゝ紅や花さくろ　松尾 弘次

実も色ハうまれ付とて花さくろ　任口

実のまさる物もなかりの花さくろ　玖也

名の花見てそれたに花かしはさくろ　貞

梔子

おもしろと見すしにする垣かなれ　徳元

いさのもん木の茄の花の法　重頼

水鶏

七夕や戸をたゝく水鶏かな　忠満

扉も立するはる口をたくる水鶏かな　立圃

蚊

蚊のこゑに火ゆる方ちやう四方の耶　宗壽

夜乃蚊ハ蚊の付てこゑにひゝか　重勝

うたゝ寝も蚊こそあハれとおもひせ　玖也

青くにまくるさかん蚊屋のうち　貞盛

大江山いく野もこゆや丹波の屋　宗立

蚊のこゑハうるさき妻の姑かな　正直

なくさ蚊のせゝりもまはし夕烟　瀬及

かのこゑハ宮女なる霞耳すれ　良景

くらひつく血ある蚊をしらてとる夜かな　河内 延之

風ふ蚊乃なきひくハゆるき柱かな　七月 重方

あつき屋よたゝく蚊帳やあをて渡里　次良

夜の雨やうて雲のひる蚊のよ川毛

蚊のこゑやうきひまなれ妻乃書　玄玖

夜の雨ハ竊なふよなき蚊帳かな　政之

呉竹の代まつりあやうき萩蚊かな　昌房

宇治ふれと蚊のさしゆるや上人紗　立圃

蚊帳よりも漏さぬかとり蚊ぬまかな　同

## 蓑虫

みのむしハやみと屋くたひも古河の虫　春可

火とりむしひえてやはなひしき　好元

## 橘

たもけりし橘の香や反魂香　重頼

かりそいそみなる椒の那色かな　康甫

若竹

竹の子ハみな古性のむまれかハり

幾く子にこゝろしめるや園の竹　常久

それ〱ハ世におくれ親の子たかれ　盛一

竹乃子のころ〱〱や兄弟　想一

親の子ハ親またられぬそひ孫ふ　幸和

暁竹のすゝや垣の枝さうら　同

醍醐味やむし竹の子の水加減　空存

おや親の子をなふひやあ月閑　重方

迴文
中くらし竹の子のけたしらくかな　京　政成

竹の子やそたてゝかゝる家乃杖　之政

子のこゝろハ子世の日といのち若竹ふ　任口

若竹や根よけ出見ゆる馬乃鞍　徳元

子やうしそて身ハやさ萩乃女竹　大谷　貞盛

竹の子ハすりしかゝのさかりかれ　智詮

むまれ〱世紀持親ハ子ともかな　立ん

未来のむ乃親馬や老乃杖　催矢

よく毎れかゝの親子や萩の竹　嶺利

生れ世の〱やむ竹乃年子かな　常辰

子なくしても世に有しあるや女子竹　政之

麻よりもすくなる竹の子たかれ

子乃親ふまくすゝ世よりまさる竹に　家雅

新宅は竹乃子の薫かな　貞之

若竹は素紙に笛のこゑもかな　立圃

竹の子もはや並なす孝の道　同

竹乃子は名や清さけりく八九節　同

若竹のまたまし悩や竹のよつ大婦　同

若竹の飛鳥は御しはしもかれ　同

竹の子やうき世おりのたそかれこ　同

蛍

夕川や虫に声ゆの火の影もなし蛍

蛍火の影濁はいはまくよいけ乃水　光貞妻



風にちる蛍は波の花火かな　良春

さゝ浪や鹿に火ともしけり蛍　幸和

みゆる稲と栄光は玉はほたるかな　氏重

蛍火は川の瀬中はやいとかな　孝晴

水と火の相性もよし紀かゞみかな　屋一

雅守ま川すて蛍乃飛火かな　家宗

むしもひかりに隔る蛍かな　貞徳

宇治川く火花とらるゝ蛍かな　同

高雄山音のゑよるも火ともかな　同

類火そとたゝひにうそや飛蛍　同

文字られて鹿紙しらぬ蛍かな　正式

火ハ消えあや作りなまや飛螢　弘永
夜のむし水にあらむかるゝれ　定勝
行灯乾きる螢やかゝる風情　休音
月夜中にやミくとかゝる螢ゝ飛　空存
螢火ハらんてたこれ哉ひかりゝゝ　光有
夕ぐれよふまは螢のひかり出ゝれ　光重
草の葉の露やかゝるひとかまゝ玉　貞義
出ハ火なり火ハ水よ入ほるゝ飛　和通
みる人の目かゝし花かなる乃火　交雲
螢火とやハとをけさん曲ぬかし　皇慶
拾火よかゝりてもゝるほたるゝ哉　吉亨

やミくと生とくれぬるほたるゝ哉　信元
螢火ハ闇よりおるひかりゝ飛　同
池乃坊もたちゝ沈る螢や水熱火　白云
頭からし尻ハかくさぬほたる哉　慶哉
風ゆかりもゆるハ流の沢るゝれ　廣寧
まくろりに飛火とみるは螢ゝ飛　静壽
わかと星とみて天の川の螢ゝ哉　利貞
橋姫の灯明かまるやよ飛るる　重頼
そらよれよ扇乃芝とまよ飛螢　同
光かりとみしハ螢の尻目ゝ哉　同
たんすいの医学の宗ゝてよ飛螢　元隣

月乃夜にかくるゝハ闇の螢かな　元定

ほたる火や扇の芝に草乃かけ　正吉

入あひの鐘ハ螢の火打かな　後輝

螢見んと寺と宇治との間かな　牟田 忠利

屋出螢よるハくれとも昼みえし　古市 正信

むかしゝか何そと人乃とふかゝる　重因

いさり火の影ハかくるゝ夜目遠目　久忠

昼も木の下闇照せほたるの火　常辰

蓑乃袖ひかりかゝるやとふ螢　同

昼ハいさ葉かくれていきく飛ほたる　景言

螢火をとら川を流黄かねの泡　友貞



火縄すゝのはかゝるに清み絃　好与

螢火にひかりや露乃玉の精　秀立

石山乃ほたるに影や万灯籠　同

光ともる川螢や文殊支利菩薩　信世

夜のむし飛く火の行ほたるかな　昌房

五月雨りやまは螢に日てりかな　同

螢火ハ玉藻の前に日かりかな　立圃

かゝり火も螢もひかる源氏かれ　同

静にもまき螢も影やちんちろ里　同

ちり影の赤さや猿とよふかる　同

天と地乃ちらひよかゝる星乃影　同

## 短夜

夜の雨やたれもひまなきせし一寝　宇都宮 季清

みしか夜のあくるハいかの人中宿　良景

夏乃夜や朝霞なかりし宵明けし　友貞

夜の雨ハ山ほとゝすれハ朝霞外　昌房

夏の夜のあくと告るやちゝやの声　立圃

白川乃夜やふて邯鄲のゆめくら　同

## 夏月

うしろ夜のあくるや月の宵いらき　幸和



みしか夜ハいさよひもゆかれ月の舟　京 重政

夜の床や追手にうしほ月乃舟　知徳

廻文 みな月をとくてそくてと沖津浪　立夢

月我まよむ十五も涼し水の下　昌久

西ひかしとるかゆりきる夜乃月　四谷 不卜

鳴りや雷光ちらまつ夏の月　成政

夜の雨ハそ川とめゆらの月見るか　美濃 一眠

白川の夜の月見る猫やうきさきの宅　東源

もしるや月の扇の墨なかし　新山 正信

水月夜の晴るの月や世價の玉　友閑

六すゝは下の句なかし夜の月　智敎

重山の月またせてくれよまくらか　正朝

くの霏の扇か夜の来年乃月　方孝

家乃歌泊月とられひかれ　嶺利

麦痩のわらわや月の顔法師　嘉也

足もやき次日禅すらる川の月　友貞

涼しさハ扇の風か川乃月　昌房

わしもやき天道転かるの月　立圃

廉子

待人に村されて肝やけしぬる　立圃

麦草

悪草とハいへきものや無人草　定時

なくてれ灯無草の志まもかられ　重頼

身やせとをおハめうかの子たらぬ　以重

執みさ拾落りなりんめうか字　宗寿

花の名や見かる秋もわとれ草　忠満

とそれし西旅か世人の無人草　正直

矢笛草いまとく背や花うれ　丹波 重勝

兄弟さハ瑠璃とや野への無人草　見藤

うりうつや一花こかる無人草　月笑

かる無い友魂香か無人草　親十

去よつけや余国もおなし世の友　重次

かきつはたの難字か風くるま　貞昌
とれか名乃花よいよいよ風車　流味
文みしてうけるや小町かきつ花　伊賀上野 一笑
夜草かや皆一門名の花を縁者　堯
うらみある一根やうき草の行衛　嶺利
夏草や艸粘の床れ春さてみ　友貞
連理とは麻すりつまする蓮かれ　資方
さそふ水あらは気も浮草の花見かな　岸安
水草の花の波紋や浮線綾　三信

樗

あれ程にかりみはてたらん雲見ん草　重頼

青梅

すいあてみとらりや梅紅さ月雪　正直
あらし吹の梅やすさき狗父しのミ　重方
青梅は未咲花の青うかな　盈之
或梅も実はをとゝくし御祈禾　昌房

五月雨 付梅雨

五月雨や山鳥の尾のなかさらん　芳友
さゝれいたのし糸まて日かれ　徳元
五月雨の空や月日のねき嵐　幸和

さ月雨ハ大海とかや井の蛙　貞徳

さみたれハ水色なる山もなし　同

菖蒲酢もまし海や新れ梅乃雨　同

五月雨や下界へ川を空の海　重頼

さみたれハ河内とかうね雲もなし　同

さ月雨や雲の袖のあらひ汁　吉人

水つけ木とのもとなるや梅乃雨　吉厚

五月雨ハ作り庭もや沖の石　昌意

浅ミたれや穀の湯の大なまし　信勝

さ月雨ハ塩の庭なるみるまかし　道宅

さみたれハ天下一河のみたれかれ　良重

瀟湘のよる盃をいさ五月雨　(小谷)立静

うら堀や水まてすゑと梅乃雨　三十

山みたれさうなうまや流ゆれ雨　光貞

さ月雨り十分盃の池の水　親十

さみたれハ津もしく菜れ葉りうれ　業秀

日晴のうちは母や出る五月闇　(佐々木)定行

花笠や夜ハ雲して梅乃雨　順三

さ月雨縁てからまの地震かな　常辰

さみたれにちうさに濁やまとの鵜　同

桜川やこまとハひと川むかれ雨　家言

五月雨り国とや水の浜千鳥　友貞

何ゆゑりまん海こそ也如月香　宗雅

如月香やみなきそれは海かみ　好子

草木の露や富士木枝の香　同

ふりかれも難波津うくや梅乃雨　同

たゝ沈の水や枝折し花の香　立圃

木陰よりうつる墨も梅の香　同

かきひらくやあまた見えする梅の香　同

## 端午 付菖蒲 粽 菜玉

大和ぬきの新の菖蒲やなよ刀　大山氏

夜前そいよひ玉江乃芦粽　長治

二日酔とふや六日の菖蒲酒　成次

おれぬまにわくよほそ菖蒲ぐ　則常

名よみてもまくや難波の芦粽　親房

流しさや水よりあくる石菖蒲　貞盛

百草の中に名のある菖蒲の葉　親十

新の書とそれかきひろき花あやめ　方女

酔々酒々菖蒲をひそかにこよひ水　嶺利

国ぐさは菖蒲刀やたんごの内　常辰

あきさそく根つよし新のあやめ　定親

根わされハ似せむらさきの花あやめ　同

麻ほうね菖蒲より皆ぞ速いか　政之

さよのなや難波の芦と篠粽　昌房

篠のくも菖蒲うきねの粽かな　同

粽みさに菖蒲かざるや板作り　立圃

のきあれつゝしも菖蒲うきねやめぐらす　同

軒口りりそれぞれあやめれうる箆　同

くも玉や袖りしぬひ目の糸よりき　同

これも世のうきり粽よ人心　同

## 競馬

くらべしも里の髪なけいとくれ　貞盛

落なくこそ家戯さとしも駒くらべ　白云



花かしおもへかもとろくさ毛や競馬　和年

馬のさうさ月れ毎もおしそろへ　季吟

かんなり代追うけゆくやまけ古くそ　不枚之家

うけてのさびしあしハ程競馬の郷　昌房

かをまけく捨鞭とあけいとかな　同

賀茂山へさかるまゝ入あいとくれ　同

## 帷子

あいろハきてしく清き捨衣しるも　信元

水立つりそめくもいつや湯帷　德元

唐布やちらくきわり衣古るも　方正

麦衣うすくや人のあつくるし　　玖也

着くもかまはぬ人はいかにかちくさ　　宗信

手白より麻あらぬのや○さらし　　重頼

えりうらハかろくやすし滝ぬらし　　正直

はやさうまうの帷子の袖はゆき　　花房 信定

うくひすやもちぬくもうし宮さらし　　可章

なつさうしこのまさいは紀深かのこ　　友貞

かさぬるは名や木賊よ信濃布　　好与

うらのうすきハきたにそう雲はるし　　宗雅

黄色く麦わたにくし白さらし

## 早苗

腰おもはうつる田子はすうるれ　　重頼

出雲ハ国の月の田うへの帆　　清下

神代よりうゑてやしぬる田子　　立安

## 瓜　付 茄子 小角豆

梵天の○綛和国本まくハうり　　貞徳

氷ほとひゑぬる瓜や砂糖瓜　　同

畑ハ何といひ作りても木瓜か　　同

鳴瀧や茄子なりさかりとも宥　　瑞竹

ちまつりの心そはしる小姫瓜

うる風も照日のしも紙さつけり哉　重頼
名ゆめてくらきつ斗桂小姫風
わさ花ハゆくの十八さゝけかな
胯乃絃かりそめ落つる小姫風　正知
（迴文）たらひすがくやむじいむやく茄子さゝ　村滋
桂しき人ハいけもなまむく茄子畑　友雪
わる時ハ蝶のとさしや砂糖風　顕成
風ハ茶入済るや袋のとおきまゝ　未安
貴きハ人高人か小むし先風　定成
とりくれ名もかま風かくす風　慶哉
枕およわるやどれも連理の枝さゝけ　世耻



枯柴といけ垣となさゝけ哉　三辰
うす山風けふ柴やこれもこう稼風　大坂 家信
おん天の甚霧もかくや風乃味　意朔
盗色くころきや墨の角さゝを　昌非
くちひる風おかけひらくしつや生茄子
数ふるね月まさゝ人年や老茄子　麻布 常信
垣くもりいひぬしそ人なるしい小姫風　元宜
文字まで縦も切やまきらん風と風　立圃

夕良 付昼良

夕良のまゆまゆやまゆまゆき花の時　重頼

とる我も千瓢とるに明日の秋　三信

夕顔とゑんする紙燭の光哉　重良

木はさひの風やたのみてからひさこ　播州 延之

昼かほや夕顔まとひ我ねる世里　小出 道政

石竹　付 榁子 麻麦

なてしこや三紀綵さくすの野の花哉　幸和

なてし子ふしやしまひかる菊乃哉　知徳

なてしこや我肩ふの世つる忠なりか　以一

なてしこの露やこらして見らる　倭晋

うすくうく榁子や程ゟの里　酒田 一元



なてしこれかくまん坊や草乃陰　播州 清元

菊露やあつく榁子のおちらぬこと　治住

草の花や麻刈も見とる夜乃花　常辰

日さかりを何ゟまへ人の石竹　友貞

鮎

うましさ事鮎まつ割しうゝかな

鱸さへもさて我木せよ鮎乃実　幸和

鮎見くれ淀しきおもしろ鵜飼船　宗雅

釣あけて羅紋作りや鮎ゟ手す　友貞

氷室

氷室もる是一日やこほりの餅　立圃

異国まて氷室の例や白砂糖　同

冬よの名や砂糖にかよふ氷もち　同

一夜酒

こゝろみれ味や河乃瀬一夜酒　和年

豊酒給うさぬるやちよに友　常辰

酒入て竹やしちかく一よ酒　有哉

雲紙るにしやあまにひとよ酒　同

残菊

夜菊みとく白露や一夜さけ　重良

夜きくも根さへうまるや花の友　常辰

残菊よたちそれの香や合音　定親

夜きくハ秋なき時乃さかりかな　昌房

扇付團

山風紙縁より涼しうちわ扇のれ

涼しさも末ひろかりし扇の那　貞徳

風の縫まくいかゝの扇かな　同

風乃神紙たゝみあてやうちわ扇　幸和

涼しさのあつく不乃扇かな　永直

三笠山より出し月かもな團　重方

六月も雪れ柳さにあふきかな　政以

六月ハ扇を津かふる先かな　正直

風そよく小川を忘るゝやうらさ　正甫

吹風や扇をつかふ手たゆめ　貞盛

絵紙書て汗をかゝせね扇の郷　重含

あつさ紙もらを捨まなんあふきかな　寛政

涼しさもうろうく抔ま上持扇　昌意

持小あ人ハ猿りさんと扇かれ　盛之

また持とあすハ宮とも持扇　重頼



手ハ風か風ハ手なり持あふきかな　元宜

扇よりひらきゝ涼し宗口　吉里

涼しさの手こゝろへやゆるら扇　方孝

手にふやするゝみたり乃家乃風　玄札

風月乃才あるものハあふきかな　同

手すさひの扇やこれも風車　賢秀

ひと日にくまはすハ扇車かれ　可閑

折ふしに庭乃草木も扇の郷　清下

開きまと扇れ折りや露れも　親正

ひらひらの風ハ志やうゝ扇かな　立安

涼しさハ風給まふあてゝらまかれ　未知

涼しさは手の物にする扇かな　嶺利

[illegible]麿[illegible]つゝむ扇かな　同

すゞしさハ津らぬ河の面すゞしさ　常辰

手に持と風ハつゝまる扇かな　同

名どころの芝ハ吉地の河つゞき　同

かざす日ハいつとこゝろせる扇かな　宗言

夜寝ても扇や風乃袂　同

涼風の手にもとゞまる扇かな　友貞

夏ながら扇ハ富士の雪絶か　定清

絵姿は写す折々の扇かな　満直

汗ふきの志るしとする扇かな　誉文



數の了安も見つけし要圏かな　耕寂

折やらば[illegible]の風乃扇かな　芸番 武珎

夜ともさするや扇の表の風　芳命

無風の吹ハ班女が手つきかな　一守

絵合ハ十二の[illegible]の扇かな　芸番 守武

来ぬ秋ともに[illegible]たる扇かな　重一

涼しさいつしけるの扇かな　肥前 如自

布団[illegible]ハかくひしきよおふ事　平野 勝政

墨添雪月しやえまし古扇　家雅

風の手もまはるゝ扇かな　親十

めでたさよ先えに方の圏かな　親信

富士山を行まにも川や扇の絵　昌房

霞西や日笠ともなる扇の邪　立圃

人毎にあふくやまちあつさ　同

汗やまくハ名えうの汗やうさ園　同

河ちかきね宮やめくらん霞扇　同

月見るねあまり此岩戸の扇哉　同

涼風の御色とふまとよれ扇の礼　同

涼しさは進上にあつきかな　同

吹風は細工ありある扇かな　同

汗紙さへ哥書まとる扱つさの邪　同



鵜　付川狩

後世ハいかならひの世かくん鵜縄かな　空政

鵜つかひの手縄を川ハ身哉られ　定親

川狩や結ふ中も冥とか　常辰

河狩の時や青葉此紅葉謝　好子

ふみ紙見るく心やゆきかうひ舩　立圃

入いらね蚊帳ありなをく涸の冥　同

蟬

長寺の吟しもやまね蝉の声　貞徳

山の鳥もおとろかす声や蝉乃琴　重頼

夜すむも影ハ附ぬそ一きの声　江州高橋氏 正信

蝉の声や守ふ志くまね日照雨　成之

三山ホ見その梢とや蝉乃声　意翔

山ひこハおつむしりか蝉の声　昔光

涼風いさちや涼しう蝉の声　立女

うきね句かせミしく世ミの声の比　重明

えの山しや蝉の附雨乃雨用意　定親

うつくしさかゝるそ蝉のぬけ殻　友貞

夜の錦のかれよゆわや世ミの声　立圃

## 夕立

鳴神や夕立雲のうち太鼓　長吉

世経ふりてふる夕立や年乃時　貞徳

夕立の晴間や雨のあしやとまた　紹胜

ゆふ立やぬらしね名取のいつミ川　定親

鳴神や夕立雲乃あし拍子　重因

ゆふたちや肌かゝひうの汗拭ひ　嶺利

夕あらしや青海原の波あらし　政之

富士山や白雨ふらす雷乃峯　同

白雨ハきえし川風や秋乃息　昌房

夕立や氣色晴てんの風乃雲　立圃

ゆふたちも志ひまやきるゝ笠のあし　同

夕立ハまた天國のながれかな　同

雲嶺

雲は嶺もなくらしけり冨士の山　李重

冨士山や炎天すみる雲乃峯　流味

暑き日の跡や見する雲のみね　来安

崩るゝハ天狗たをしか雲の峯　友貞

夏山とこれやゆきん雲のみね　昌房

冨士詣

おかむてハ不死薬や宝佛　徳窓



りゝ水数々垢離や冨士詣　来元

今朝やおも雨ふりさし冨士詣　春行

涼風や河邊のこゝれ冨士颪　昌房

祇薗會

玉鉾は道あるは我や祇薗の会　正後

祇薗会やせんきまるくひく山　休甫

祇薗会や鉾もたやしれ子の色　一

蓬莱の山ゝ熱田の祇薗會

祇薗会今ゆく花残か夕や児桜　永吉

祇薗会や跡のまたく手向山　如貞

多川よしや山中まれなる饅頭会　梅盛
山もさくらにうき都も饅頭の香
七草粥三のや拝乃児　重頼
菊拝や餅の園生の花車　賀貢
山ふかみ貴し饅頭の香　嵐任
饅頭会の庭に拝や立田山　重周
秋拝や山水うつる饅頭の会　正朝
山下舟のわすれかし饅頭会　昌房
饅頭会や餅の外振る湖し
秋　同

嘉定

菊のくは嘉定乃酒や十六重　常辰
拙山もや先も嘉定の年乃寿　立圃

暑日

一字や百韻もおもし見そさう　盛三
あつき日見さにいちきさう風の神　天満 有宣
おつさりや十方世界光明寺　貞徳
夏の日は身の外をあつさ乃やいとかな　良景
はあつさ行とうこゝへや色き　長好
あつき日や川の流し乃葉団扇　為之
あつものちゆやあつき日照雨　常辰

さしかゝる暑き夕日に松の声　同

汗

刀さへ汗かくさやの山路かな　徳元
汗水となりし丸曲の鞠の庭　瀘直
あせや身にかゝれる出羽の衣ころ　親信
鵜かひとは身よりおこるや汗の玉　嶺利
おちつるや出月は入りく汗ふつく　素言
あせや泉わきそなかるゝ身も流る　昌房

納涼

立よるは大木の陰よ夕涼み　重頼
暑き日もまた白乃あれ松し出月中　康甫
身あらふる人なかりしをせく清水かな　光有
舟の帆やこまも涼しきたゝ遊　定時
六しや涼しき風の外世月　楠氏 正長
涼しさや寿命の茶いさきの松　如貞
さむしろに衣肩ぬけ夕涼み　重頼
廣袖はしきりしき津めの夕すゞみ
涼風は月にうつの森の茂りかれ　元重
氣晴るゝや風新窓の上涼　宗立
涼しさや宮代めくる風車　津国 勝吉

風ハお汗ハ入つる木かけ哉　皆川住
寝て見ぬ秋風ちかし竹枕　孝元
涼しさや梅かくさきはうらの座敷　春良
涼風の神はやしろの下屋敷　之安
すゝ風みおかりきはとれぬ木陰かれ　同
えにはに帆の形や涼しの庵かけ　常辰
涼しさやいつし圓をひらく浮絵　同
あつき日は清水や猿の馬とく枕　定親
涼しさ我静にして葉の風枕　同
汗水とゝ出る堤ふところみ風　未妾
とゝ川緑や風すゝしみ道抜哉　親信



波立は水や涼しき井戸茶碗　友貞
うかりまて奥あめゆうし風乃口　昌房
日盛も木の下陰や夕すゝみ　同
涼しされなとしやをの帆かけ船　主圃
涼風の文字綴見ゆる風鈴哉　同
涼しさやみこゝろや竹くき端あり　同
夜なかし土用や秋乃夕すゝみ　同

## 薫風

人うまぬ小わひ袋に来は風　信親
手の内と風袋ひらきせいわかれ　素言

風かわる梅せこの空むれ森林　信世
茶湯すり風のかおりや玉島山　親十
大将かさなゝかゝ月のみなと風　立圃

## 泉　付清水結

涼しさは河風にもまさる泉かな　正式
手拭の常もあかね清水かな　一路
迴文　小山や清水夜見し山や澄　安田 重友
立寄て扇紙たゝむ清水かな　親雙
汲酒す涼しさをまくいつかな　立圃



## 蓮

水草とはよ名や池の蓮花舟　芳友
よごれぬはいさとかしこき蓮かな　慶哉
蓮こそ七種なりて佛の座　昌意
かくやたゞ絵やいかまし華葉舟　宗利
蜂の巣すり実もそのまゝ蓮かな　浪ト 吉里
迴文　かすりはすらはのこれ蓮かれ　佐々木 定行
水おられぬはや蓮の花の文　季安
月さへも墨染と沼の蓮かな　清ト
光りそふ蓮の露や佛菩薩　昌房
持有む妙法蓮華経の文　立圃

## 御祓

呉雛や流してよそにみそき川　貞室

打ましと治まりし世御祓川　定親

遷宮や年にあらふる川社　同

湯さてゝや水わきかへる御祓川　昌房

御祓する身の桜あや汗のこひ　同

入風呂や垢もふかきも川祓　定圓

汗をぬくはせすや人のみそき川　同

もろ人する川風や貧の毒なかし　同

夕涼や貴賤男女の御祓川　同



## 暮夏

夜と秋やいすゞの箸や夕凉を　元清

夜吹ハ涼ありきる扇の風　可全

林鐘もくれや入相夜の音

## 雜夏

胡瓜や末の丸つるを青山椒　吉友

かほる風に笠紙うつやさゝつ茸　重成

すゞの虫も宿の淀なや子松茸　正直

ひよけかうつむすてさ桃の木実かな　幸和

廻文

よしやみん花の実ハ名に梅月しよ　元宇

あひぬまは月と浮草や夜乃かぢ　加友

こゝ梅ちれさうやくよりや香薷散

清めまかくれぬ句ひぬくろりかな　宗静

艸よやも花も名のゝん桐乃頭　重以

かゝて思ひ郭公かそつや百日紅

酔心よりきさふなきし麻黄酒　知徳

涼しさハ秋やくりとゝろてん　重頼

達者ら旅りさ紀ら川萩乃花　貞徳

淡くたしやみくめ夜茶碗　茂堂

三つくれ宿ら川風炉の茶乃湯かな　呑瓢



わきかへりたきよハ風炉の茶の湯哉　西山 良安

物乃名もところてんとやうらゝさ　不卜

ふんばりて去月ハ風のうかりかな　清卜

追善

うつくしきもなきこそ神や去月のり　定親

閏こそさつき浮しれ咲とられ　好与

香久山や雲ハ衣の去月雨　友貞

折ぬえくく都もまきねさつき清しま　立圃